

生きるための政治を創る子ども達～空気による支配を吹き飛ばす知的衝動

これまで全国各地の小中学校で総合学習を行ってきて、何度も目の覚めるような経験をしたことがある。ある生徒達が発した一言が、それまで教室を被っていた空気を一変させ、創造的で開放的な雰囲気に変えた瞬間を何度か目にしてきた。

そのような発言をする生徒の多くは、問題を抱えているといわれている生徒たちだ。わたしが行う総合的学習の授業には、特別支援学級の生徒が参加することも多い。授業の後で、「あの子が手を挙げて答えるのを初めて見ました」という声を何度も聞いた。それらの生徒たちが、私の授業の中で驚くべき発言をした。ただし、この「驚くべき」という意味は、私と先生達とではだいぶ違う。多くの先生は、そのような生徒が発言すると「いいじま先生がみんなに聞いていることと関係ないでしょう」などと言って、慌てて生徒の発言を抑えようとする。確かに、その生徒は質問と関係ないことを言っているが、私はその生徒を突き動かした知的衝動を知りたいので、「君はなぜそのように思ったの？」と聞いてみる。すると、そこから驚くべき展開が始まった。その生徒が自分で感じたことや自分の方法で考えたことについて説明し出したからだ。さらに私が「そのように考えた理由は？」と聞くと、生徒からさらに驚くべき言葉が発せられた。「驚くべき」は、その言葉の深さや哲学的な内容にあった。

大人の多くは考えていると思っ込んでいてだけで、本当は考えていない。本当に考えているのは、素直に感じるができる幼い子ども達だと思う。私は子ども達との対話を通して、いつもその思考の深さに驚かされる。

「すごいね、そんな風に感じたり、そんな風に考えることができるんだね。私も勉強になりました」と感想を述べると、他の生徒たちもその生徒に触発され、次々と自分の感じたこと考えたことを発言し出すようになる。それまで、先生が期待している答えを見つけて発表しなければと考えていた生徒たちを被っていた、重苦しい空気が一気に吹き飛ぶ。生徒たちの知的衝動が解放され、教室は一気に創造的な雰囲気になる。

ひとりひとり違う感じ方や考え方があることを知る面白さや楽しさが生徒たちを包み込む。そして、差異を知り共感の喜びを得る。生徒たちひとりひとりがそれぞれに考えや意味が生まれる場であり、その多様さはどこまでも深く広い。生徒達は多様性の海に飛び込む。大海原を覆う波のように無数の対話と問いがくり返され、その下には深淵（哲学）がある。

「他の人達は別の考えを持ち、別の生き方をしている。この状況を認めることが、全てを包摂しようとする思考の強迫を克服する第一歩です。実際、だからこそ民主制は全体主義に対立するのです。全てを包摂する自己完結した真理など存在せず。さまざまな見方の間を取り持つマネジメントだけが存在するのであって、そのような見方のマネジメントに誰もが政治的に加わらざるをえない……この事実を認めるところにこそ、民主制はある」と1980年生まれ哲学者マルクス・ガブリエルは言っている。

様々な人々が様々な形で得た現実を持ち寄ることで、私達は現実を共有することができる。しかし、それらの現実を包括するひとつの正しい現実（事実）が用意されている訳ではない。対話と問いの連鎖が途絶えれば多様性は見失われ、全体という虚像が生まれ人々を空気のように支配する。

多くの授業では生徒達は、正しい答えを言わなければならないという思考の強迫に常に晒されているのかもしれない。正しい答えは先生が知っている、先生が考えるように考えなければ正しい答えに行き着けない。生徒達は、そのような空気によって支配されているのかもしれない。それでは、自ら問いを建てることも、自分の方法で考えることもできない。つまり、考え方を憶えるだけで本当に考えることができない。自分の中からふと浮かんできた問いや違和感、それらの知的衝動は押え込むしかない。問いや違和感を上手にやり過ごす、本当に考えようとしなない生徒ほど良い成績を得てエリートコースを歩んでいくとしたら恐ろしい。

私が行なっている地域の課題や環境問題、まちづくりをテーマにした総合学習にははじめから答えなど無い、生徒も教師も答えの見つからない難問と向き合わなければならない。現実の捉え方は様々あり、意見の対立もある。このような学習でも、空気を読むのが上手な優等生が、無難な答えを言って学習を納めようとすることがある。しかし、ありきたりの答えでは、問題解決につながらないし、自分で考えないから学習も深まらない。私が生徒達に投げかけたのは「問題とどう向き合い、どのように考えたらいいのか」という問い、つまり、答えの選択以前に取り組むべき問いだ。「自分で感じ、自分の方法で考える」ことから学習は始まり、ひとりひとりが「考える場」となって開き、他者との対話を通して柔軟に変化することでテーマを共有し取り組むことが可能になる。ただ多様な意見をまとめる方法を学ぶだけでは、深い学びにはならない。ひとりひとりが、対話と問いの連鎖の中を生きる技法を体得するための学習でなければならない。

私はこのような対話と問いを通した学習の中にこそ「生きるための政治」が芽生えるのではないかと考えている。政治と現場との乖離や政治の劣化、空気による支配などが指摘されて久しい。党利党略や私利私欲で動く政治は多様な人々の思いや願いを吸い上げる根を失っている。自分に都合の良い現実を他者に押し付ける、都合悪いことが起きたら上手にやり過ごせばいい、対話と問いを失った政治が、根無し草になって独走している。それは、私達が生きるための政治ではない。

政治を建て直すためには、政治に生の現実を取り戻すこと。政治を専門とする政治家が行なうもの、議会で行なうものという特権的な政治意識を転換しなければならない。政治という概念を全く新しいものに代えていく必要がある。それには、私達がひとりひとりが、生きるための政治を創り上げていく場となり、知的衝動に突き動かされながら生きるための学習を深めていかなければならない。それは、私達自身が他者と共に、生の充実を求め生きようすることにほかならない。私達の生の現実にしかりと根を張った草の根の政治、政治家のための政治ではない、私達が生きるための政治が今求められている。

2018年8月6日

認定 NPO 法人アサザ基金 代表理事 飯島 博